

# 最

近、バルセロナ五輪について聞かれることがある。二〇二〇年東京オリンピックに向けて何か学ぶことがあるかと問われる。

私は一九八五年、五輪屋内競技場を手がけていた磯崎アトリエの新米スタッフとして、バルセロナに赴いた。開催地決定の一年前だった。モンジュイックの丘の屋内競技場建設予定地の脇に建っていたのが、廃墟のスタジアムだった。当時私には、なぜこれを改修して五輪スタジアムにしようとするのか、まるでわからなかった。実はここで、一九三六年七月十九日、人民オリンピックが開幕するはずだった。一九三六年は、ベルリン五輪の年だ。ヒトラーがオリンピックをナチス一色に染め上げようとしているのに抗議して、候補地争いで破れたバルセロナがもうひとつのオリンピックを開催しようとしたのだ。世界的な反ファシズムの勢いに乗って、参加表明の輪が広がり、ベルリン五輪を上回る選手団六千人の大イベントが見込まれていた。

ところが、開会式前日の十八日、軍がスペイン全土で同時多発クーデターを起こした。バルセロナのまちでは、叛乱軍の侵入に備えてバリケードが築かれ、スポーツの祭典は幻に消えた。これが市民戦争の始まりで、次いでフランコ独裁時代が四〇年におよぶことになる。不安定なスペインにあつて、一九三四年事実上の独立を宣言していたカタルニアの大統領コンパニイスはフランコ軍に捕えられた。コンパニイスは、モ

## 各 人 各 説

# オリンピックという墓標

千葉大学大学院 教授

**岡部明子**

Akiko Okabe



ンジュイックの丘で処刑された。だから、バルセロナ市民は、因縁のスタジアムでの一九九二年オリンピック開催にこだわったのだ。今日、スタジアムのメインゲートには、オリンピックへの無念を胸に不本意な死を遂げたコンパニイス大統領の名が刻まれている。

一九七五年フランコは長寿をまっとうして死に、スペインは民主化に向かった。一九九二年バルセロナ五輪は、市民戦争とフランコ圧政から立ち直り、地中海都市の明るく生き生きとした姿を世界中に印象づけた。オリンピックを照準に急ピッチで進むインフラ整備についてバルセロナでは当時、「都市整備の四〇年の空白期間を四年で埋める」とよく耳にした。

今思えば、オリンピックはフランコの死から一七年目にして市民社会からファシズムの残影を葬り去る墓標だった。一九六四年東京オリンピックは、敗戦から一九年目にあたる。新幹線と首都高の未来都市イメージは、戦後と決別する墓標だったともいえる。

二〇二〇年オリンピックにあたり、私たちは、何の墓標を何に託して立てようとしているのだろうか。二〇二〇年に向けて、東京は間違いなく変わる。それがどんな姿なのか私にはわからない。ただ、それがどんなものであれ、後世の人たちによつてきつと、「成長と開発の時代が終わったこと」の墓標だった、と語り継がれていくような気がする。